

FZR400R

1986年 / 市販車

ヤマハは1980年代に入り、RZ250の市場投入行なうなど、2ストロークのモデルはレーシーな方向性を目指した一方、4ストロークモデルはツーリングでの使用を前提としたモデルが多かった。

市場でのレーサーレプリカブームが高まるにつれ、国内F3レースのワークスマシンのノウハウを盛り込んだモデルの開発が行われることとなった。

XJ400ZSの水冷4ストロークエンジンをベースに、399cc 55ps から59ps 12,000r/min へ高出力化、フロント16リヤ18インチのタイヤの構成で165kg という軽量な車体と相まって、本格的なレーサーレプリカとして市場で人気を博した。

デザイン面では耐久レーサーを彷彿とさせる2灯式ヘッドライトが特徴的だが、ライダーが伏せ姿勢をとった場合、極力燃料タンク上面を極力フラットにすることで一体感を得られるよう、二段重ねの造形構成を採ることで、市販製品として製造上の許容範囲ギリギリでの強度基準を保ちつつ、平板な印象とすることができた。通常、レーサーレプリカモデルはフルカウルの人気が高いが、このモデルは初代モデルで採用したハーフカウルモデルの人気が高いのは、カテゴリーのイメージよりも、デザインのバランスが評価された事例と捉えられる。

